

こころ日記

「ぼちぼち」

(4)リスカのA子

脇野 千恵

小学校からの情報で、「境界性人格障害」という病名であがってきたA子。

4月、早速保健の先生から、彼女の小学校での記録や、病名についての説明などが書かれた分厚いファイルが送られてきました。

中学校入学後も、寡黙な生徒でした。小学校では専ら保健室登校だったようで、なかなか教室には入れなかったということでした。

やがて教室から飛び出し、あちこち逃げ回るようになりました。逃げる場所は階段下や、トイレ。そこで手首を切る行為が始まりました。小学校時代からやっていたようですが、血を見ることに慣れていない他の小学校から来た子どもたちは、大騒ぎ。教師ももちろん、そのようなことに慣れているはずもありません。常にカッターを持っているので、それを取り上げるのに

一苦労。毎日翻弄されていました。

彼女から取り上げたカッターは、1年で50本ほどにもなったでしょうか。取り上げても、取り上げても出てくるカッターに頭がおかしくなりそうでした。

A子のリストカットは、時には深く切ったりするので、救急車を呼んだこともありました。関わろうとすると、暴言を吐き、会話が成立しませんでした。なかなか信頼関係が持てないことに、教師たちはいつもイライラし、なぜそのようなことをするのか理解できませんでした。

1年の担任とは気持ちの行き違いがあり、学校でのリストカットがひどくなる一方でした。血を出して暴れる彼女への対応が議論され、生徒指導の方針が出されました。

「リストカットした時は、すぐに親を呼び、迎えに来てもらう！」

というものです。

朝登校しても、1時間もしないうちに父親に連れ戻されるA子に、となりのクラスの担任である私は、せっかく来たのに…、何とか学校にいさせてやれないものかと思ったものです。

やがて、A子は学校へ来なくなりました。不登校になっていったのです。学校としての建前は、A子に登校してほしい。しかし本音の部分では、厄介者でした。

とんでもない子を引き受けたと嘆く担任に、納得がいかない思いが募っていきました。

2年次のクラス編成では、いつものごとく、問題のある生徒を誰が担任をするのかといったことが話し合われました。話し合いというか、押し付け合い？といったところでしょう。なんとなく私が担任をしてやらなくてはという思いがあったので、1年間、リストカットの彼女と付き合ってみることにしました。

「境界性人格障害」という病名は、いつつけられたのでしょうか。小学校での奇異な行動に困った担任が、病院への診断をと勧めたのでしょうか。

診断の結果、様々な薬を処方され、中学校入学当初も、実にたくさんの薬を服用していました。薬を飲むとおとなしくなるというのが、教師の見立て

でしたので、薬の副作用などの心配など及びもしませんでした。

しかし、彼女は少なからず薬によって心も侵されていったのではないかと、思っています。

元担任から、「先生、これ！」と言って手渡された例の分厚いファイル。境界性なんかかんとか？とにかく専門用語がたくさん並んでいて、とても読む気にはなりません。担任をするからには、熟読しておかなければならないのですが、引出しの奥深くに押しやったきり、目に触れることはありませんでした。

2年生になったA子は、新しいクラスが珍しかったのか、学校に登校し始めました。しかし、リストカットが止んだわけではありません。相変わらず、階段下に隠れては、手首を切る毎日でした。保健の先生もどうしたものかと悩みを共有してくれました。

そんな状況を放っておくわけにはいかず、生徒指導の色々な意見もあり、スクールカウンセラーにかかることになりました。リストカットは思春期によくありがちな行為と理解しているので、私自身はそんなに驚きません。関心を持ってほしいというアピールととらえれば、関わり方は難しくないと考えていました。

スクールカウンセラーとの面談の日、A子は若い女性心理士の前で手首

を切ってしまいました。何せ専門家との面談なので、すっかり安心して託したのですが、ダメでした。若いSCは、面談中にリストカットとは何事か！と立腹し、それが原因かどうかわかりませんが、その後SCが学校へ来ることはありませんでした。おまけに、そんな危険な学校には居られないので辞めると、SCの母親から電話が入りました。そのことの方がショックでした。

一方職員室では、とんでもないことをしでかしたものだ、教師たちがまた騒ぎ立てました。

A子の家族

彼女の家族は4人家族。スーパーの店長をする父と、パートをいくつか掛け持ちで働く母、小学校に通う妹でした。

家族の情報は1年の担任からはほとんどなく、2年生になって初めて分かったことがいっぱいありました。

父親は九州出身。母親は四国出身。遠く離れた地方出身の二人が出会ったのは、集団就職でした。ある大手繊維工場で出会った二人は結婚し、2人の女の子が誕生しました。

父親はまじめに働き、結婚後しばらくは何も言うことがない生活だったようです。

もともと父親自身は親との折り合いが悪く、実家とは絶縁状態にありました。家庭の中では寡黙で、卑屈な態

度で母親に接するといった感じでした。母親も口下手で、人とのコミュニケーションも実に不器用でした。

父親と母親の仲は徐々に距離ができ、いつのまにか家庭内別居という状況に陥っていきました。不仲になった原因はよくわかりませんが、経済的なことが大きかったように聞いています。

母親は「離婚」を希望していましたが、自立できないために我慢するしかありませんでした。

そんな両親を見ながら育ったA子は、何をしても（手首を切っても）父母から関心を持って接してもらうことはありませんでした。

2年生になって

やがてA子は、リストカットの他に、喫煙、ピアス、睡眠薬、万引きといった問題を抱えていきました。

教師は、大変な子を担任すると、「あの子さえ、このクラスにいなければ…」

と思うことがあります。それは明らかに排除の考えです。クラス経営の難しいところですが、担任がそのような考えをもつと、子どもも同じように排除をしていくものです。

何とか教室での彼女の居場所の確保をと色々考えました。

A子が学校へ来た日は、できそうな仕事を見つけ、友だちと一緒に活動さ

せました。たとえリストカットしても、家には電話をせず、きちんと気持ちを聞き対応しました。教師への信頼度が非常に低かったので、暴言しか返ってこない言葉に苦労しました。

2学期、父親に迎えに来てもらうことが少なくなり、学校にいる時間が少しずつ長くなっていきました。しかし、相変わらず口が悪く、友人から理解されないところがたくさんあり、よくもめることもありました。「もう帰る！」と言って飛び出すA子を、何度追いかけたことか。

一方で、体育大会や文化祭などに参加することで、クラスに溶け込むA子の姿がありました。学校に来ることの意味はおおきなあとと思いました。

おとなになったA子

今A子は、障がい者として「療育手帳」を持ち、作業所で働いています。

中学を卒業後、高校へ進学しました。その喜びもつかの間、すぐに退学してしまい、深夜徘徊、シンナー、援助交際、万引きの常習。パトカーにも何度もお世話になったそうです。

一体どんな十代であったのか、音信不通だった時期があり、わかりませんが、本当に命が危なかった時が何回もあったことは確かです。

年に数回、彼女は我が家に遊びに来ます。もう大人なので、堂々と煙草を

吸いながら言います。

「中2が一番楽しかったなあ」と。

リストカットは、なかなかやまらないうと言っています。家では相変わらず父と母は、家庭内別居状態。妹は引きこもっています。最近父親が失業したので、家の経済をとても気にしていません。

「うちの年金がなかったら生活できひんのやでえ」と偉そうにつぶやくA子。

今は20代後半。

「若いころは、子どもがほしいと思っていたけど、今は自分に子どもができたら、育てられへんやろなあ…」

「うち、長生きできんかもしれない」

将来の夢も、やりたいこともないというA子。頑張るとは言えません。今は住む家があり、何とか暮らしていますが、やがて父母は先立ちます。そのあと、A子姉妹はどんな暮らしをしていくのでしょうか。想像すれば心配はつきません。

私のような人間でもいいから、彼女と繋がっておきたいと思っています。

まだまだ目がはなせないA子です。

(中学校教員 脇野千恵)